横芝の碑（その八十四）

皇漢医学の著者 湯本先生の碑

成蹊学舎伊藤英次郎先生謝恩碑等でご紹介申し上げたことのある栗山川畔東町墓地の一隅に、低いブロック塀に囲まれ、〝湯本求真の墓〟と刻まれた人の背丈程の碑が建っています。これが昭和漢方復興の租と称され、斯界の信望を集め、斯の道を志す人は必ず通読し、又指針とするという「臨床応用漢方医学解説」及び「皇漢医学」等の著者である湯本四郎右エ門先生追憶の碑であることを知る人は少ないようです。

碑は門下生が建てたもので、碑の裏には、「先生は名を四郎右エ門求真と号せられ、明治九年三月二十一日石川県に生れ、明治三十四年金沢医学専門学校を首席で卒業せられたが、同四十三年和田啓十郎先生著医学の鉄椎を読んで深く感激し漢方医学の研究を決意せられ、三年にかけて皇漢医学全三巻を著し、これを自費出版せられた。この書は昭和の漢方を代表する名著で、これを契機として漢方復興の機運が醸成せられ、今日の隆盛の基礎を築かれたものである。先生は豪放磊落、活淡簡易の生活を旨とせられ、読書以外の趣味を持たれなかった。ただこよなく酒を愛し、昭和十一年十月二十二日九州往診の帰途姫路の客舎で急逝せられる。一男三女があり、嗣子一雄君は慈恵医科大学を卒業して先生の跡を継ぎ、漢方の医学を以って門戸をはったが、不幸昭和二十年夭失され、医家としての先生の系統は中絶した。然し現代日本の漢方は、先生の流れを汲む者は勿論先生と流れを異にする者も先生の皇漢医学の影響を受けない者はないことを思えば、先生こそ昭和漢方復興の祖と言っても過言ではない。先生の墓は、もと浅草の西照寺にあったが、今ここに移し門下生一同相寄り先生の冥福を祈るものである。「昭和三十九年三月之建　授業、大塚敬節　無為降彦書」と刻まれています。大塚敬節先生は漢方医界の権威で、以前某一流新聞に漢方医学の論文を連載しておられたのを覚えておられる方もあると思います。こうした門下生を持たれる湯本先生の人となりは、その碑文でもよく推察できますが、先生が漢方医学に志しその研究と復興の声を揚げられた頃は、医療界は勿論、社会全般に恒る風潮が西欧依存の最も甚しかった時で、日本的、東洋的なものは地を払って影を潜めていた時代でした。従って時には社会の艱難に遭い、又西に東にと居を移す等憂患困苦交々至る、という苦しみも重なりましたが、徹して志を変えることなく所信を守り、一身をこの道に捧げられました。しかもこの時代に有りましても、先生は西洋医学に対しては優位を認め、ただ、その欠けた点を東洋医学的治療法により補塡を考えるという極めて謙虚な態度を保持されていたということです。こうした先生の雅量及び人徳と面影は、自然に門下生の心の中に生き続けていました。そして先生逝いて二十八年昭和三十九年、先生追憶の念止み難く、御遺族の了解を得て建てられたのがこの碑なのです。

写真は、湯本四郎右エ門先生追憶の碑で、斜後に見える墓石が元浅草寺に建っていた墓石です。

先生のご一家は、東京の本郷神明町に住んでおられましたが、長男故一雄氏逝去等のこともあって東京から一雄氏夫人の生家横芝に引き揚げて来られ、東京には縁故者がなくなったため、先生のお墓もここに移されたということです。

尚、「最近この碑文を基にして先生の郷里金沢にも顕彰碑建立の計画が進んでいる」という話を伝え聞きましたので、長男一雄氏の未亡人という方を探そうと、同じ姓の湯本つる子さん（東町二）をお訪ねしますと、その方がご遺族の湯本さんだったのです。そして、いろいろと厚かましくおねがいして、先生の門下生の方々からの先生追慕の文書や、碑建立の了解を求めた金沢方面からの信り等も拝見させて頂きました。その時、このご主人が、いつか〝児童館の敷地と稲荷神社の碑〟で取材させていただいた黒野たかさんのお嬢さんであること等もお伺いし、ひたすら恐縮した次第です。（本稿取材に当り、門下生からの来信に、先生称讃の文面が多かったのですが、ご遺族の湯本さんから「余りおおげさにならないように」との強いご希望がありましたので割愛させて頂きました。尚この場所は、冒頭にも申し上げてある通り、伊藤英次郎先生謝恩碑等でもご紹介致してありますし、湯本四郎右エ門先生の碑は、鉄道線路を背に、道路を左にした角の辺りに建っていて、すぐ判りますので、案内図は省略させて頂きました。）

町文化財審議会委員
小沢春光氏寄稿

▲栗山川畔東町墓地の一隅にある“湯本求真の墓”と刻まれた碑